台湾(&上海)留学体験記

@大角菜穂（経済学部4年）

留学歴
・国立台湾大学
(2005年9月～2006年6月)、
・上海復旦大学(2006年7～9月)、
・フィンランドオウル大学
(2007年9月～2008年3月)

留学の種類 全て交換留学

留学の動機 中国語のマスター（台湾＋上海）と、アジア圏外の適応能力と英語の強化（フィンランド）のため。

(写真右から２番目が大角さん)

お金 ¥¥¥

費用 台湾 >> 寮費(年間)4万円、生活費(1ヶ月)3万円以下
上海 >> 寮費(夏学期)約10万円、生活費(1ヶ月)2万円以下
ﾌｨﾝﾗﾝﾄﾞ >> 寮費(1ヶ月)4万円、生活費(1ヶ月)4万円以下

ある１週間のできごと

	月	火	水	木	金	土	日
午前	08:00-10:00 中国語授業	08:00-10:00 中国語授業	08:00-10:00 中国語授業	08:00-10:00 中国語授業	08:00-10:00 中国語授業	睡眠	睡眠
午後	13:00-15:00 経済発展	14:00-17:00 投資学	13:00-15:00 国際関係論	友人と買い物など	13:00-15:00 経済発展	13:00起床 友人と食事やお出かけ	観光
放課後	友人と食事・勉強	友人と食事・勉強	友人と食事・お茶・ﾊﾟｰﾃｨｰ	友人と食事・勉強	友人と食事・お茶	友人と食事・映画・寮でのﾊﾟｰﾃｨｰ	友人と食事・勉強

(備考) 注：台湾大学前期の時間割
台湾では、寮にキッチンがなかったため食事は全て外食だったためいつも友人と食べにいっていた。
朝食は屋台のもので授業中に軽く食べ、昼食は買って帰ったり友人と食べていた。

＜はじめに＞

・2005 年 8 月 24 日～2006 年 6 月 25 日：国立台湾大学にて交換留学。
・2006 年 7 月 2 日～2006 年 9 月 1 日：上海復旦大学にて夏学期交換留学。
・2006 年 10 月 1 日～2006 年 10 月 8 日：中国瀋陽、大連にてホームステイ。

以上が、私の中国語留学である。実は、私は中学くらいから英語圏への留学が夢であった。本当は念願のイタリア語学習も大学から始め、イタリア留学も夢見ていた。つまり、中国語圏への留学は私にとって予想外の出来事だったのである。中国語の学習動機は、高校時代に友人が中国語を学習していて、「中国語を話せる」ことが羨ましかったことから、大学進学後第二外国語として履修し、更にその発音や声調の魅力に虜になった。英語、イタリア語に続き、中国語と、私は外国語を学ぶことが好きなのである。趣味とまでいえるかもしれない。今回の留学先が中国になった一番のきっかけは先生の助言であるが、留学から帰国した今も、行っている当時も中国語留学をしたことは本当によかったと思っている。中国語留学は、本当に私にとってとても価値ある大きなものであった。

＜留学までの諸手続＞

最初、私は復旦大学に行く予定でその手続きを進めていた。ところが、６月になり急遽復旦大学に交換留学生数等の問題のため行けなくなり、台湾大学へと変更した。この時復旦大学に私費留学で行くか台湾大学に交換留学でいくか、という選択の決断には３日の猶予しかなかった。しかしそこで私は、当初復旦大学に半年間留学し４年で卒業という予定を、台湾大学に１年間交換留学するという大幅な変更を３日で決めた。今思えば私はいつでも大きな決定を短時間でしている。実は今回の留学を決めたのも締め切り３日前であった。

それからが大変であった。台湾大学へ申請書を送り、入学許可書を待つ。入学許可書がなくてはビザの申請も航空券を取ることもできず、ひたすら待つ。台湾は中国語の漢字が違うのでそちらの勉強も開始した。結局入学許可書が届いたのは、８月に入ってからでビザの申請のための健康診断等を含め２週間、本当にギリギリにビザを取得し、航空券を買った。

＜台湾へ＞

慌ただしい準備後、8 月 24 日に台湾へ 40kg の荷物を抱えて行った。台湾大学の交換留学では、交換留学生に一人台湾大学生のボランティアチューターがつくらしい。しかし私は急な決定だったため、台湾出発前日にチューターと連絡が取れ、空港までの迎え、入寮手続きの手伝いは全て友人又は友人の友人にお願いした。実際に自分のチューターに会ったのは、到着 2 日後だが彼は最初からとても親切な良い人で感動したことを今でも覚えている。ちなみにこの時初めての留学だった私は、日本から海外でも使用できる携帯電話を持って行っており、台湾の携帯を買うまでは非常に便利であった。

とにかく最初のうちは、台湾の気候と雰囲気、つまり留学の雰囲気、人々の雰囲気に慣れることに毎日は凄まじく速く過ぎていっていた。といっても、実際には 2 日くらいで慣れた気もする。驚いていた様々な変化に 2 日後には「平気になったな。」と感じたことを覚えているからである。

＜国青宿舎＞

“国青宿舎”、これこそが私の台湾留学中の“家”である。住んでいるうちにそこはいつしか本当に落ち着く場所となり、心安らぐ場所となり、団欒の場となり、我が家になった。一番好きな場所なった。と、こういうととても素晴らしい寮のように聞こえるが、この国青宿舎、台湾大学

の中では交換留学生又は大学院生等対象の寮で一番良い寮とされていたが、決して新築ではなく、汚く狭い 11 階建ての寮だった。

2 階、4 階が交換留学生、それから上の階は台大の院生等用である。部屋の種類は寮費によって 3 種類あったが、私は一番安いシャワー・トイレは共同という 2 階に住んでいた。一部屋 6 畳くらい、上のベッドと下のベッドがあり、上のベッドの下はクローゼット、横に机が並びルームメイトと隣に座る仕組み、その横にガラス扉つきの棚といったコンパクトな 2 人部屋。一番高い部屋はリビングルーム付きの部屋もあった。しかし、私は 2 階に住んでいて本当に良かったと思う。シャワー・トイレが共同なだけあって、何かというと部屋から出るため友人ができやすかったからだ。特に私は人と話すのが好き、いや淋しがりやなので、廊下で友人と長話というのは毎日のことであった。しょっちゅう友人の部屋に行くか、友人が部屋に来るというのが常であった。

●戦い

私が世界で一番嫌いなものは虫である。宿舎の大難題は、虫である。いやこれは、台湾の大難題でもある。まず、ゴキブリは親指サイズなんてものではない。あまりに大きすぎてその構造がはっきりわかる程の方々が出現する。それはもう頻繁に出現する。4 階に住んでいる友人のようじーずは、来て早々バスルームの排水溝からのゴキブリの大群襲撃(15 匹以上)に遭い、全員が恐怖に慄いた。ドイツ人の Anna は洗濯室の隣に住んでいた。ある朝 Anna が目覚めると彼女の枕元にゴキブリが死んでいた。ちなみに彼らは街中も普通に走り回っている。夜市（台湾名物のマーケット）では台湾人の女の子がサッカーのようにゴキブリを蹴っているのを見たこともある。そこら中彼らの無法地帯なのである。いくらゴキブリは何もしないといっても、やはり気持ち悪い。気持ち悪すぎる。私も夜中に寝ぼけて洗面所に行き、ものすごい至近距離で彼を拝んだときには、夜中も気にせず叫んだ。隣の部屋の友人の部屋に彼が出現したときは、二人で大声で叫びながら電気ラケット（蚊退治用）と殺虫剤で戦った。あまりの私たちの奇声と泣き声に 2 階の住人が皆驚いて部屋に集まった程だった。本当に怖かった。友人の彼氏は、レストラン（といっても、庶民の食堂のようなところ）で紅茶を飲んだら、そのコップの中に彼が入っていた。恐ろしすぎる。と、ゴキブリを語り始めたらきりがない。

次は蚊である。台湾の蚊は、日本の蚊とは比べ物にならないほど速い、賢い、しぶとい。私の全身に彼らとの戦いの戦傷がある。この痕はいつになったら消えるだろうか。私はなぜか人一倍刺された。蚊帳を買ったので寝るときのみ安全であったが、毎日刺されていた。台湾には、テニスラケットのような蚊退治用の電気ラケットが売られている。もちろんそれも私は持っていた。

その他は、得体の知れない虫たちである。台湾では、飛蟻が有名なのだが、彼らは雨の後に出現する。直径 1cm くらいの茶色のミミズのような体に羽を持ち、雨のせいで羽を失うと、隙間という隙間から屋内に避難してきてプチプチ音をさせながら光を目指して襲撃してくる。よく共同の洗面所で大量に死んでいるところを見ていたのだが、とあるたまたま友人が誰もいない日の夕食後、私はそのプチプチ集団に襲撃された。窓際に座りパソコンに向かっていた頃、突然机の上に気持ち悪い虫が現れた。なぜ部屋に入ってきたのだろうと思いながらティッシュで片付け、またパソコンに向かうとプチプチと聞こえ今度は 5 匹くらいが現れた。びっくりして 1 匹ずつティッシュで片付けたものの、そこからが恐怖の始まりで、その後ものすごい数の奴らがプチプチ音を立てながら窓のサンの小さな隙間（隙間があるなんて知らなかった！）から、部屋に侵入してきて窓を這い上がる、机の上を這い回る。しかし気持ち悪いので 1 匹ずつしか片付けられない。この世で一番虫がダメな私は、友人に電話しながら本気で大泣きし、彼らと戦った。その後隣人が帰宅し最後は彼女に助けてもらい、窓の隙間という隙間を殺虫剤を含んだティッシュで埋め、一段落した。しかしそれからの数日も気が気ではなかった。近隣の部屋でゴキブリ侵入事件が起きている中、私の部屋のみ被害にあわず悠々としていた頃の突然のプチプチ事件であった。台湾にいる頃、こんなことで本気で大泣きしたのはこのときだけだと思う。あとは、ばかでかい蛾、手のひらサイズのカタツムリ（貝殻はヤドカリのよう）、気持ち悪い色の虫たち…といったところ

『台湾＆中国・上海留学体験記』　大角 菜穂

であろうか。

その他の宿舎での戦いといえば、50 人以上の留学生のたった 2 台の洗濯機と乾燥機の取り合い、しょっちゅう故障するシャワーブースの取り合い、自分専用と勝手に皆が決めて使うトイレの取り合いなどだろう。

●ルームメイト

前期の間、私にはシンガポール人の秀梅というルームメイトがいた。彼女は既に中国語が話せるので中国語の授業はなく、普通に台大の授業を受けていた。最初の頃は私の中国語は無だったので、英語も交えての会話だったが彼女のほうが一つ年上でよく一緒に遊びに出掛けた。彼女に台湾人の彼氏ができるまでは…。彼女に彼氏ができてからが、私たち 228 号室の生活が一変した。彼が夜遅くに寮に遊びに来て朝方までいるのだ。狭い狭い部屋に 3 人、空気も薄い。一番困ったことはシャワーのときで、共同シャワーの 2 階に住む女の子たちはほぼ全員バスタオル一枚で廊下を歩いてシャワーに行く。2 階には男女両方が住んでいるのでたまにその格好で男の子に遭遇することもあるが、誰も構っていなかった。その調子だったので、彼が来ているときは部屋で脱ぐことはまさかなかったが、私のシャワー中に彼が来ていてバスタオルのまま彼と遭遇ということがたまに起こった。その他着替え等の問題もあり、一度文句を言ったら「なほのそういうところを見てもお子ちゃまだから何も思わないよ。」とコメントされた。それで私の我慢もピークに達した。口論になったが、秀梅は彼以外のことではとてもいい子（彼のこととなると彼一番で何も見えなくなるのだが）で、いつも許してしまい、その問題の彼にはうまく言いくるめられて終わっていた。前期も最後の方になると私の中国語力もアップし彼らの喧嘩までも理解できるようになり、あまりの居辛さにスイス人 Andreas を始め色々な部屋に避難させてもらっていた。それにしても台湾人の恋愛観を始め各国の恋愛観はやはり違うと考えさせられた一年であった。

秀梅が帰国（1 月中旬）した後、5 月まで私にはルームメイトがいなかった。5 ヶ月間の一人部屋というのは快適で、天国で完璧に“私”の部屋になっていた。彼女の寝ていたベッドはソファとなり、棚は私のもので溢れ、みんなの溜まり場となった。ところが、5 月末のある日突然昼食後ドアを開けると大きなスーツケースが置かれていた。メモを発見すると彼女はオーストリアから来た新しいルームメイトとある。その時期既に帰国する人が多く、部屋も何部屋か空きがあり、この時期から来る人なんていないと思っていたのに“私”の部屋にやってきた。仰天と疑問と不安が入り混じり隣人のゆーふぇいに付き合ってもらい、部屋の整理をし、彼女の帰宅を待った。新しいルームメイトの Emma は中国語がゼロでそこから 228 号室は再度英語の空間になった。彼女は日本のアニメが大好きで、隣から“私は世界の平和を守るために悪と戦う～♪”といったアニメソングが聞こえてくることもしばしばあり、その度にちょっと笑ってしまった。彼女とは 1 ヶ月の付き合いで私も帰国 1 ヶ月前だったこともありそこまで仲良くならなかった。最も、ルームメイト同士は大抵そこまで仲良くならないというのが普通であった。やはりその狭い空間に一緒に生活するからであろうか、ルームメイト問題というのは大きかったようだ。隣人などの方が仲良くなるというのが私の 1 年の寮生活での考えだ。

●パーティー&Naho’s bar

私は各国から来ている留学生たちと、台大生ボランティアチューターたちととても仲良くなり、よく宿舎でも出掛けたり、パーティーが開催されていた。誰か新しい人が来るとパーティー、誰かが帰国するとなるとパーティー、ハロウィンパーティー、クリスマスパーティー、誕生日パーティー、何もなくてもパーティー。しかしこのパーティーのおかげで私の友達の数も増え、友情も深まり、時にはアジア系の留学生は私の

『台湾＆中国･上海留学体験記』　大角 菜穂

みということも多々あったが、そのせいか何でも積極的に参加していた私は寮でも軽く有名人になっていた。何より私は友人とわいわいするのが大好きだからである。特にハロウィンパーティーはみんなで何時間も時間をかけて仮装をして、そのための準備は大変だったがとても楽しかった。11 階建ての宿舎の屋上では、台北の綺麗な夜景が見れ、そこでは始めのころ隣人と寝転びながら語り合ったり、留学生同士親睦を深めた。実際国青宿舎の屋上は穴場であると思う。

留学生の大好きな場所、クラブは台湾では他の国々よりも安いようでみんなほぼ毎週のように行っていた。“良い運動”“運動に行く”というのが、クラブについてのドイツ人の anna と mina の名言である。確かにお酒を飲まず“跳舞”（ダンス）しに行くなら、時間は真夜中だが良い運動である。もうシャワーも浴び、化粧もなくメガネで部屋で友人 vinnie とまったりしているときに突然ものすごい勢いでノックされ、Haoru と Andi に行くぞ！！と言われ、更にどんどん私の部屋の前に人が集まり断りきれずに 5 分で準備をして行ったこともあった。とても懐かしい。そして、とても若い。このクラブ文化の中で十分に世界の文化を身をもって学べたと思う。

Naho's bar、それは私が一人部屋になってから生まれたものである。私はいつからか飲み物を大量に所持していた。日本茶、烏龍茶、紅茶、ハーブティー、コーヒー、ホットチョコ、お酒…24 時間 Naho's bar はオープンしていて、いつからか食べ物も所持するようになり、昼間は隣人との息抜きお茶会、夜はライトを照らしソファで bar オープン。時には人が多すぎて周りの部屋から椅子持参ということもあった。隣人の aki とはワインでしょっちゅう語り合い、よく一致団結したものだ。その他、タコライスパーティーや餃子パーティー、お好み焼きパーティーなど色々な食べ物パーティーが Naho's bar で開催され、その度に私の部屋はものすごい匂いに包まれた。納豆＆タコライスパーティーの匂いは特に強烈であった。

＜食生活＞

宿舎にキッチンはなかった。部屋で料理をすることも禁止されていた（それでも簡単な料理パーティーは開催していたが）。火事防止のためだそうだ。私は台湾にいる 10 ヶ月間全て外食で過ごした。日本の場合外食の方が高いのだが、台湾は違う。むしろ外食の方が経済的なのだ。また学校のすぐ裏が食堂街なので 1 食 50 元から 100 元（1 元＝3.5 円くらい）で食べられる。朝ごはんは、学校の門横の屋台で**蛋餅（台湾のパンケーキ？）**か**火腿三明治**（ハムサンドウィッチ：15 元か 18 元）を食べ、昼夜は大抵その“後門”“alley”と呼ばれる食堂街で食べた。台湾には色々な料理があって、火鍋（**吃到飽：食べ放題）などの**台湾料理もおいしかったが他にもイタリアン、New York bagel（ベーグルやさん）、Subway を始めとしたアメリカン料理、ドイツ料理など友人と食べ歩き、グルメ探索にいった。

台湾で一番有名なものは夜市である。夜市とは午後 6 時くらいから夜中 12 時くらいまで開く屋台や路上の店、小さな店のマーケットのことを指す。台湾人は夜型生活らしく、家族連れで平日でもこの夜市でも遊んでいる。食べ物を始め服や靴、アクセサリーを安く売っている。もちろん買うときは値下げ交渉をしてから買う。屋台の食べ物を食べ、買い物をするというのが一般的であり、私もよくストレス発散などに夜市に行った。台北市内にいくつも夜市はあるのだが、食べ物ならどこ、買い物ならどこなどともう夜市を極めてしまったほどである。ただ人混みがすごいことと少々汚いことが難点かもしれない。

＜国立台湾大学＞

●事務関係

日本人には考えられないほどルーズかもしれない。そのおかげで助かったこともあるのだが、

大抵は困らされることの方が多い。連絡されるべきことが連絡されない。たらい回しにされる…など。手違い（嬉しいものも大変なもの）も多い。しかし、なんだかんだ言いつつも大事に至ることはなかったし、私も今ではそのペースに慣れてしまって日本は厳しいなぁと感じてしまうほどだ。

●教授と学生

日本以外の国の大学では、教授と学生はそこまで仲良くないものらしい。先生と飲み会なんてありえない話のようだ。先生の研究室に行くこともほとんどない。台大は台湾で一番優秀な大学だけあって、学生は本当に頭がよく要領もよく、いつも勉強していた。図書館システムは充実して普通の貸し出しは 22 時までだが、地下の自習室は 24 時間開放、コンピューターセンターも 24 時間開放であった。

学生の服装で印象的だったのが、皆好んでクラス T シャツならぬ学部 T シャツなど所属団体の T シャツを着ていたことだ。メガネをかけている人もほとんどで、全員同じ顔に見えた。そして暑いのもあるのだろう、T シャツ短パンサンダルが基本スタイルであった。

校舎は趣のある古い建物が主流で時にびっくりするようなトイレがあるところもあったが、図書館前から正門に続く大きな椰子の木の並ぶメインストリートや、とても発達した体育館（まるでドームのよう）、人の集まる池など広いキャンパスで、散歩をするのに最適で、休日は家族連れで来ている人々がたくさんいた。非常にのどかなキャンパスだと思う。夜にメインストリートで椰子の木の上に真ん丸の満月が見えたとき、とても綺麗で様になっていてなぜかアラビアンナイトのようだと思ったことがある。

●授業

前期はまだ英語の方がわかったので、英語での授業を２つと中国語での授業を１つ取った。やはり授業数は日本にいる頃よりも格段に少なかったのだが、外国語での授業は体力の消耗度が違う。常に神経を集中させて話を聞き、メモを取る間にそっちに集中すると話がわからなくなる。そこで私はメモを取るよりも話を聞き取ることに集中した。最初の頃は全くわからなかったのでつまらないと感じることもあったが、クラスメートや教授に頼りなんとか乗り切っていた。教科書は、授業時の言語が中国語・英語に関わらず、英語のものを使用している授業ばかりであった。その頃の私には話すことも読むときも書くときも全てにおいて、英語から日本語、日本語から中国語、又はその逆というように英語と中国語の間に日本語を挟まなくては理解できない、言語のスイッチができず、それが一番時間も体力も浪費し嫌なことであった。しかし教科書は英語、レポートやテストは中国語という逃れられない状況であるため、なんとか乗り切った。

後期は、もはや英語よりも中国語の方が上達し、むしろ英語は下手になってしまったので、全て中国語での授業（４つ）をとった。内容もゼミ体系のもの、グループワークやプレゼンテーションのあるものやフィールドワークのあるものと、前期に経済学を多く取ったこともあり経営学の分野の授業を多めにした。ゼミ体系の授業は人類学の経済分野の授業だったので、内容も難しく終始わからないことだらけであった。グループワークでレポート提出、報告が数回あったが、その度にクラスメートに迷惑をかけてしまったし、先生にもあまりの理解度のなさに見放されてしまい本当に辛い授業であった。その他の授業は経営学で、内容もわかりやすくグループワーク、発表、フィールドワークを楽しんでやることができた。中でも国際企業論は、催しものが好きなようで授業開始後に学生の誕生日を祝ったりカップルを祝ったりとケーキやお菓子が配られることが何度もあった。広告論の先生は、日本のことも知っているようで松平健の“暴れん坊将軍”が好きであった。

１年の授業の中で一番好きだった授業は朝８時から２時間の中国語の授業である。やはり言語の授業が一番好きらしい。２ヶ月単位で３学期あり、毎回先生が変わるのだが、２人の先生とは本当に仲良くなり毎日の授業が朝早いのに楽しみで行っていた。１人相性の合わない先生がいて

『台湾＆中国・上海留学体験記』　大角 菜穂

先生ともクラスメートとも口論になったことがあった。先生方からは中国語以外のことも習ったし、周老師とは一緒に買い物にいったり、彼女の家で餃子パーティーをしたことが最高の思い出である。台大では、中国語を中国語で習えたことがとてもよかった。

＜趣味＞

私の台湾での趣味は、“ものづくり”であった。私のボランティアチューターの**宸緯**は本当に出会ったこともないようなとても良い人で私の全ての面倒、私の友人留学生の面倒、もはやチューターの役割を超えていると周りにいわれるほど親切で優しく、感謝をしたくて誕生日に日本風カードを作ったことから始まる。元々細かな作業やら創作活動は好きだったのだが、まさか留学先でここまでするとは思っていなかった。作品としては joanne、秀梅への誕生日カード、曽老師へのお礼カード、Andreas へのマフラー、愛への写真立て、あきへのブッシュごまちゃん、ゆーふぇいへのハートワンコ、けいちゃんへのかばんネーム、しんごへの T シャツ、Armi への Panda 用パンダ、Vinnie へのキャミ、周老師へのにこにこフラワー、David への誕生日カード…と、どんどん手の込んだものへと作品は進化した。風邪か何かで咳が止まらず 3 日ほど寝込んでいた頃に、人が来ないことをいいことに 2 人分の誕生日プレゼントのぬいぐるみをせっせと作っていた。これら創作活動のため、留学中関係ないだろうものを数多く持っていたと思う。ちなみに私の誕生日のときには、皆から普通のカードでは面白くないと本物の化粧品を使って化粧をされたお面カード（皆の本物キスマーク付）とたくさんのプレゼントをもらい、お面の気持ち悪さに嬉し泣きしてしまった。彼女は一生私の魔除けになると思う。

＜台北市と台湾人＞

台北市は札幌から行った私にとって、よく発展していてその人の多さからも東京をイメージさせた。あたかも原宿のような若者の場所、西門街や六本木のような信義区の世界一高いタワーの 101、海沿いのデートスポット淡水など見所満載の地である。交通手段も MRT というモノレールのようなものでどこでも行きやすく、バスも多い。中でも MRT の管理は素晴らしかった。街中は道路もがたがたで、そこら中に屋台もあり食べ歩きが基本なので決して綺麗とはいえない。しかし MRT は飲食禁止、その罰金は 1500 元ととても厳重であった。そのためあれほど食べ歩きの好きな台湾人が一人も飲食しておらず、綺麗な駅と車内が保たれていたのである。台湾は近代化を図っておりそのための様々な規制が取り組まれている真っ最中であり、バスの中も飲食禁止であった。道端はまだまだというところだが、これからもっと環境重視した街つくりが行われていきそうだ。

そして台湾の名物光景といえば原付バイクの大群である。みんながみんな原付に乗っている。家族の 3 人乗り、4 人乗り、犬連れというのもよく見かけた。交差点のラインにも横断歩道、原付停車ゾーン、車停止ラインとその対応もきちんとしている。それほど大量の原付が走っているのである。

トイレ。私が台湾で“虫”と並んで難題とするのがトイレだ。私は基本的に日本でもトイレが好きではない。台湾のトイレは紙を流すと水流が弱いので流れない。そのため横にあるバケツの中に捨てるのが普通である。もちろん匂いを放つ。基本的にトイレットペーパーはない場所が多い。そして便座は女子トイレなのに上がっていることが多い。最初はなぜかと不思議だったが、皆便座に座るのが嫌なので便座も全て上げてしまい空気椅子状態で用を足すのだ。和式と洋式の数は半々か、洋式の方が多かった気がする。ドクター陳と呼ばれたゆーふぇいは、物知りな心配性の私の母的存在だったのだが、彼女の街中の綺麗なトイレ研究は笑えるものであった。

台湾人は基本的に日本人が好きだ。私は渡航前から聞いてはいたものの実際に彼らに接して驚

いた。多くの人が日本語を少し知っている。そして、街中に日本のものが広まっているのである。ファッションから日用品から食べ物から音楽、芸能までものすごい人気であった。やはり日本製商品となると 1.5 倍の値段であったが、それでも人気なようであった。日本の流行が全て流れてきているという感じである。台湾には日本の統制時代がある。その当時日本との間の悲惨な歴史があるはずだ。それなのに彼らは全く日本人を受け入れ、支持してくれている。とても敏感な問題だが、友人に聞いたところ日本のおかげで今の台湾があるからということだった。日本の統制時代に日本が導入したものによって台湾の先進化は進み、台湾経済が発展したからだと。1 年間住んでいて日本人で野次られたこと、嫌な思いをしたことは 5 回程度であろう。やはり日本との歴史問題は解決しているとは決していえない。当たり前である。授業中にクラスメートに歴史のことを含め日本を悪く言われることもあったが、日本がどう思われているのかというのがわかってとてもよかった。やはり自国を出て日本に関する討論の中で他国の人の生の声が聞けると思う。そしてそのときに自分の意見をいうことは少々勇気がいった。自分の意見が正しいのかどうかわからないが、相手がそれを聞いてどう思ったかまでを聞けたことは日本の中にいてはできないことである。

台湾に行って一番驚いたことは、台湾人カップルの大胆さである。そこら中がくっつきすぎのラブラブな光景ばかりである。校内循環バスの中でキス以上のものを見たことまである。ヨーロッパから来た友人もびっくりする程なので相当すごいことはわかってもらえるであろう。彼らの恋愛観はもはや束縛という次元を越え所有の域にも至りそうで、私には理解のできないことで喧嘩しもめ、一日中一緒にいるという状況であった。唖然とさせられるカップルストーリーを数多く聞いた。

＜台湾内旅行＞

1 年の中で、国際交流サークルの旅行を含め、台湾国内の旅行を何度かした。その中でも一番印象的だったのは、台湾の南東にある**蘭嶼**島に留学生同士総勢 18 人で汽車に乗り船に乗り継ぎ、行った旅行である。夜 10 時に乗り朝 7 時に南東部に到着、船で 2 時間揺られやっと到着である。原住民がいた島で、海も山も全てが大自然の素晴らしい島だった。島での交通手段はバイクを 9 台借り 2 人乗りで移動する。島を一周するには海岸沿いをずっと走って 2 時間くらいといったところである。島の人たちは台北市の人とは全く違っていた。肌の色も更に黒く中国語も訛りが強かったが、元気な良い人ばかりであった。ただ本当に無法地帯で、朝から酒を飲み、運転している人も数多く、私たちもバイクにヘルメットなしで乗れる（台北ではヘルメットは必須）。宿泊地は民宿の一軒家を貸し切りで生活したのだが、島では鍵をかけないことが普通で、鍵をかけたほうがむしろ危ないといわれ、人がいるときは常に開錠状態であった。そのせいで酔っ払ったおじさんが夜に何度も出入りするなどの少々怖い事件もあったが、Scott のおかげで一件落着した。彼は今でも私たちの大ヒーローである。その他、水切れが起こる（島の水使用は制限があったのに、私たちは使いすぎてしまった）、バイク転倒、帰りの船が大荒れなど問題はあったが、大自然の中過ごした 4 日間は最高の思い出の一つである。台北の都会のみでなく、まだ発達の行き届いていない島でその生活を見れたことは良い思考転換に結びついた。

＜台湾から上海へ＞

台大の交換留学後の夏期間は日本にまっすぐ帰るのではなく別の場所で勉強を続けたい。そう

ずっと考えていた。アメリカへのサマープログラム参加か中国大陸で中国語を極めるか、そのことで随分悩んだ。色々な友人にも相談し散々悩んだ末、大陸での中国語最終仕上げを決定した。上海復旦大学に交換留学でいけるかもしれないという可能性と元々行きたかった場所ということで上海を選び、手続きを開始した。ところがやはり交換留学は無理という連絡で、私費留学という選択を取った。日程的にも実際は台大の夏休み開始直後にもう上海で授業が始まるという強行突破の日程で、締め切りも迫り、私費留学のため自ら直接ばたばたと手続きをしていたのだが、大陸も事務関係はルーズでその手続きに手こずり、北大留学生センターに問い合わせてみた。いつもお世話になっているところをまたお世話になり、更になんと交換留学で夏期間にいけることになった。台湾から大陸への連絡や日本にいないことなでで手続きが大変だったし台湾撤収が早まったのだが、本当に嬉しかった。

そして、荷造りとお土産準備と期末試験勉強の同時進行が始まり、そのために本当に時間のやりくりをし、期末試験終了後帰国前日に最後の思い出にと海へ行き、肌が真っ赤になるほど日焼けし、その量ダンボール 4 箱を日本へ郵送、40kg を抱え日本に 1 週間一時帰国した。

＜上海への手続き＞

私費留学用の許可書は届いてるものの、交換留学用の許可書が待てども待てども届かず、ひとまず私費留学用許可書で、ビザを 4 日間で取得し航空券を購入、札幌からの直行便 3 時間半で上海浦東空港に降り立った。

＜中国大陸初日＞

不安だらけだったのだが、というのも台湾シックにかかっており上海に行きたくない病にすっかりかかっている中上海にばたばたと来たのである。空港への迎えもなく、北大から既に 1 年交換留学している友人にちょっとした上海の情報をもらい、大学近くのホテルを教えてもらい、不安の中夕方 6 時にそのホテルについた。台湾ではタクシーは一人ではまず乗らなかった。危険というかだまされるし、少々高かったからである。しかし上海ではタクシーは最も信頼できるもので。夜に一人で外を歩くくらいならタクシーに乗った方がよっぽど安全なのだそうだ。ホテルにつくと、そのフロントは異常に混んでいた。予約のない私は、“今日はもういっぱいで、泊まれません。”の一言で追い払われた。しかし何も地理のわからない私は近くに他のホテルがないか聞いたのだが、“出てすぐ目の前にあるよ。”と冷たい一言で放り出された。しかし見渡す限りホテルなどない。通りがかりの人に聞いてもわからないと言われ、もう泣きそうになった。スーツケースと大きなボストンバッグを持って道に立ちすくんだ。が、日も暮れ始める時間帯、そんなことをしている場合ではない。重い荷物を引きずりながらやっと一軒発見し荒れ果てた道を通りフロントについた。とても古いホテルだし対応もつっけんどんだが、他は見つけられそうにないのでそこに決め部屋に上がった。ひどい部屋であった。電気は壊れていて薄暗く、床の絨毯もぼろくベッドカバーの怪しい色。水も匂いがするし、本当にここに私は泊まるのかと恐ろしくなった。その決め手は壁に一瞬ゴキブリを見たときであった。明日の朝 9 時に出ればいい。そう言い聞かせ食欲も失いシャワーをあびシーツだけは綺麗なことを信じて寝た。もう全てが恐怖だった。いてもたってもいられず朝 8 時半にチェックアウトをし、出発することにした。チェックアウトのときの人は良い人でとても親切に道を教えてくれた。値段は最初 300 元（1 元＝14.5 円くらい）と書いてあったのに実際には 100 元であった。通りであんな部屋だったわけである。本当に恐ろしい初日であった。

それから指定されたアパートへ向かった。本当は指定日より 1 日早かったがどうにかなるだろうと思って行ってみたのである。明日からだといわれることもなくスムーズに手続きは終わり、昨夜の恐ろしいホテルの部屋とは比べ物のならないほど綺麗な部屋での生活が始まった。ルーム

メイトは既に 1 年住んでいる日本人の女の子。彼女いわく昨夜も人はいなかったので入れたはずだったそうである。本当にそれを早く知りたかった。

＜同和国際公寓＞

部屋は 3 号楼 502 号室。11 階建てで 1 号館から 3 号館まである。リビングルーム、シャワーブース、バスルーム、キッチン、ダイニングが共同で個室が 2 つというマンションの一室に私は生活することになった。綺麗で広く、ベッドもダブルベッドというだけあって家賃は一日 90 元と高めであったが、お湯も確実に出るし、冷蔵庫もあり大満足の部屋であった。何よりも台湾の寮と比べ、ゴキブリはいないしその綺麗さに感動した。掃除は 1 時間 8 元でおばさんが来てくれるということだったが、一度まだルームメイトがいた頃に来てもらったが、どうも人を使うというのが嫌で 2 ヶ月間全て自分で掃除をした。

また、洗濯機は一階に共同があるのだが一回 5 元でまた係りの人に預けるとやってくれるということだったが、敢えてそれを断りお金だけ払って自分で洗濯していた。1 ヶ月後シーツがどうしても洗いたくて、洗濯機で何も考えずネットに入れないで真っ白なシーツを洗濯したところ、洗濯機の汚れがついて洗濯前よりも汚くなって出てきて、それから全て（シーツまでも）洗面所で手洗いした。なかなかの労力であった。しかし中国では手洗いというのは珍しいことではない。台湾のとき中国人留学生はよく手洗いしていたし、街中でも桶で手洗いしている人をよく見かける。

＜夏期間の留学生たち＞

夏期間の 1 ヶ月又は 2 ヶ月のみの留学生はとても陽気であった。つまり皆遊び気分、バカンス気分の人ばかりであった。それを顕著に表しているのが、ほとんどが中国語を話せなかったことである。華僑が半分くらい、欧米系半分くらい、それに日本人、韓国人といったところだが、台湾で私は基礎クラスだったのが上海では一番レベルの高いクラスであった。台湾にいる留学生は中国語がよく話せたのでそれが衝撃で、彼らはすごかったのだと知らされた。そのため友人同士の間での第一言語は英語が用いられる。私はいつしか彼らの通訳、通訳となればもはやリーダーのように留学生グループの先頭に立って皆を引き連れて行動していた。そして彼らのおかげで私の英語力はアップした。言語の切り替えができるようになり、日本語をはさまずに中国語と英語との通訳ができるようになった。中国語の仕上げにいった上海での思わぬ大きな収穫、一番の収穫がこれだと思う。

＜大学周辺とその人々＞

正直に言って、1 ヶ月ほど上海に慣れなかった。上海の土地の雰囲気と人々の雰囲気がなぜか怪しく危険に見えていた。というのも、復旦大学は上海市の東北部にあり、聞くところによると市街地から離れているため庶民地区に当たるらしい。そのせいか、人々の感じが全く違っていた。公共のゴミ捨て場は何が捨てられていてもわからないような状況（ごみ分別がないため匂いもひどい）、横断歩道などあってないようなもので、みんなどこでもかしこでも渡る。車など気にしない。台湾もその気が少しあったが比べ物にならない。私もいつしかどんなに車どおりの多い道路でも気にもせず横断できるようになった。日本でもついその癖が出てしまいそうになる。人々は暑さのせいもあるのか、薄着を通り越して、服を胸の上まで捲って着ている。着ている意味はあるのか疑問なところだが、上半身裸も珍しくなく、服を何も着ていない子供も見かけたし、道路すぐ脇の小屋に住んでいる人たちの道端でも入浴シーンも見かけた。タイムスリップしたかのような印象を受けた。また、日本の野次を飛ばされたり、男 3 人組に囲まれ手を引っ張られた恐怖

『台湾＆中国･上海留学体験記』　大角 菜穂

体験もあり、現地適応能力が高いと自負する私も慣れるのに随分時間がかかった。

＜上海市街地＞

上海は言われている通り大都市であった。高層ビル、派手なライトアップ、そして統治時代のイギリス、フランス等の建築が残されており、中国とは思えないような雰囲気の観光スポット。しかしその全ての近代的な高層ビルがいまだに竹の足場を使った建築用法で建てられていたり、高層ビルの真横にはおんぼろ小屋があったりなど、発展と途上が混在していた。人々の感じもそれがとても強く反映されていた。台湾から来た私にとっては、上海にいる間台湾と比較してしまうことが非常に多かった。その結果、都市の規模としては上海の方が大きいが、台湾の方がその発展の手が隅々にまで行き渡っている、つまり平均的に発展しているという印象を受けた。上海も中国では経済発展都市として名高いが、国民性や昔からの歴史等、規模の大きさから政治的規律も含め発展にばらつきがあると思われた。基本的に気温は 35 度以上湿度も高く激しく暑かったので、北海道から行った私にとっては夏バテ、熱中症になるかならないかの毎日であった。それでも台湾は凍えるほどに冷房が効いていたのに対し（冬は暖房がない）、上海はあまり効いていなかった。これもその特徴にあげられると思われる。

＜授業＞

毎日朝 8 時から 11 時半まで 4 時間体制で中国語の授業が行われた。先生方はちゃんとした先生から夏期間のみの復旦大学院生の人まで様々であった。1 ヶ月ごとに先生やクラス替えなどあったのだが、正直授業の質はあまりよくなかったと思う。一番レベルの高いクラスなので教科書もサラッと終わり討論タイプの授業が行われていたが、生徒のレベルもばらばら、それぞれの国独特の発音の中国語が飛び交っていた。先生の教え方も消して上手いとはいえず、特に 2 人目の先生は心理テストが大好きで、毎日のように心理テストが突然行われたり意味のわからない討論が繰り広げられていた。あるときは教科書もそこそこに 4 時間ずっと心理テストというときもあった。

台大の語学授業も有名ではなかったが先生方は、中国語を簡単な中国語で説明するという授業方法であったので対し、ここでは辞書を引かされるか教科書にある英語で理解させられるかということが多くあまり好きな勉強方ではなかった。最も夏期間だったのでそうだったのかもしれないが。

校舎で一番衝撃であったのが、トイレだった。台湾でもトイレにはその汚さや使用方法の悪さに相当悩まされたのだが、上海はその作りからもうギブアップであった。授業のあった第 2 教学楼では、トイレの便器がなかった。ただの溝に（一応タイルだが）壁とドアがつけられていて一番前の人のみ流すレバーがあり、それから後ろにはない。つまり自分の排泄物が見られるが流せるか、排泄物が見られない代わりに前から流れてくる排泄物を見なければいけないか、という選択肢なのである。私は 1 ヶ月学校でトイレに行くことを我慢した。1 ヶ月後、もう諦めたのか順応したのかとうとうトイレデビューを果たした。基本的に復旦大学の校舎も古い趣のある建物が多かった。一つだけ近代的な高層ビルの建物が有名であったが、そこは聞くところによるとホテルみたいになっているそうである。もちろん正門近くには大きな毛沢東が立っていた。ここも広々とした緑の多いのどかなキャンパスであった。

＜病気＞

7 月中はよく体調を崩した。到着直後知り合いもまだ少なく、日本人だからと信用して悲しい思いをしたり、3 斜線道路の真ん中でタクシーから降ろされ、信号が青に変わりひかれそうにな

ったり、タクシーがつかまらずいらいらしたり、台湾が恋しくなって食欲不振になったり、原因不明の半身麻痺になったりという散々な一ヶ月であった。それでも立ち直りの早い基本的に楽観的な性格で乗り越え、8 月中は、随分生活も安定し心身ともに健康になった。当時は帰国まで真剣に考えたので相当重症だったのかもしれない。また、私が元気になった後は友人が急性胃腸炎で倒れるというのが立て続けに起こり、1 週間に 5 回も彼らを病院に運んだ。そのうちの一人の子は 1 週間で体調が直らずリタイアして帰国してしまった。やはり、上海の生活は軽い気持ちで来ると結構答えるのかもしれない。また日本人に特に多かった。他の国々の人はやはり日本人よりも肝が据わっているというかタフなのだなと感じたときであった。

＜娯楽と旅行＞

上海では、夏休み中のため中国人の友人よりも留学生の友人の方が圧倒的に多かった。留学生同士で色々な場所に繰り出したが、ここでも大人気なのはクラブである。皆毎週、毎晩のように行っていた。中国はほとんど入場無料のところが多く、先に部屋で飲んでから夜中 12 時も過ぎてから行くというのが主流であった。キッチンつきなので、ルームパーティーをしたり、映画を見たりと毎晩インターナショナルなメンバーで過ごせたことは一生のうちにもう二度とない時間かもしれないと思う。そして私の“趣味”は上海でも発揮してきた。やはり私は創作活動が好きなようだ。

旅行は、大きなところでは蘇州、南京にいった。中国はやはり広い。その広さを存分に生かした遺跡は本当に迫力ものであった。台湾でも遺跡や寺などは結構回ったが、全く違った建築方法、雰囲気で毎回そのスケールの大きさに感動した。南京にいったときは歴史問題と、時々上海でも日本の戦争当時のことを言われたりということがあったので緊張したが、思っていたよりも発展しており昔の城壁など重厚な遺跡が多かったが、中華民国関連の遺跡を回り台湾と似ている建築を大陸でも見れたことがとても印象的であった。

＜上海と台湾＞

さて、上記にも書いたとおり、私は上海にいる間終始台湾と比較していた。人の感じはというと、台湾人の方が海外のものを取り入れる、受け入れやすいという印象を受けた。それは日本人のみに限らず外国人を受け入れる姿勢というのがあった。上海は逆に外国人を受け入れるというよりも商売根性や対抗心がよく見られるという印象だ。中国の大阪といわれる上海は、確かに商売の街で海賊版、偽者グッズは本当に多かったが、接客の仕方も本当に客よりも自分が上といった感じで、日本はなんとサービスの質のいい国かと思い知らされた。

それは企業の経営方針にも現れていた気がする。台湾の国際企業に訪問した際、地域によって経営戦略が違うのはもちろんだが、いかに市場競争に勝つか、国際市場に参入していくのか、という点で他国の知識を受け入れ研究し行うという話を聞いた。逆に上海で国内企業だが、そこで偶然に話を聞いたところ全くもってその意見を曲げるという姿勢はなく、“もし自分の意見が間違っていても喧嘩になろうともその意見を曲げない”という印象があるのだが、企業精神にも関連している気がする。確かにそれで中国国内はやっていけるのかもしれないが、これからの中国大陸の経済発展においてその姿勢のままでは、いつか変化が必要なのではと感じた。

＜庶民の暮らし＞

ここで、正式帰国 1 ヶ月後に瀋陽、大連にて 1 週間友人の家にステイしたときの話を書きたいと思う。上海で 1 ヶ月鍛えられた私にもはやカルチャーショックも何もないだろうと思っていた。ところがそれは甘い考えであった。空港からタクシーで一時間、留学中 1 人では絶対に訪れない

ような庶民の住宅街に私は一週間生活した。そこは 10 階以上の建物でないとエレベーターはなく、夜でも階段に電気はつかない。日本で言うと団地風の場所なのだが、またここもタイムスリップしたかのような土地であった。上海と全く違った雰囲気で、外国人もほとんどいないため常にじろじろと上から下まで見られ、タクシーもメーターを使うのではなくお金を交渉して乗ることが多い。夜に乗ったことがあったのだが、中国語も方言がありおじさんの話は聞き取りにくいという状況の中、このままどこかに連れて行かれたらどうしようと恐怖に気が気じゃないこともあった。

生活は、水不足、電気不足でトイレもほとんど流れない、シャワーはお湯が出るのが 10 秒という状況で、とても厳しかった。彼らは水なら入りたくないとあまりお風呂に入らないようで、私もシャワーを浴びたいと最初の頃はわぁわぁいっていたのだがそのうちどうでもよくなってしまった。スリが多いので（上海も多かったが）常にそちらに気を使い、だまされないように気を使い、水の使用量に気を使い、中国人のペースに振り回され、楽しい旅行というよりも試練の旅行であった。その証拠が 2 キロ減量して帰ってきた。同じ国の中でも地域によって全く雰囲気も人の様子も違い、中国語も違い、それを身をもって体験できたことは、これから何が起きても本当に驚かないという確信につながるかもしれない。

＜最後に＞

この 1 年間、私が留学した先は中国語圏内だが、実際世界中を留学した気分である。それほど留学生同士の交流によって世界各国の国民性や文化を見ることができ、実体験により理解でき、文化が違っても人は人で共通点も多くあり、相互理解があれば文化の壁などいくらでもカバーできることがわかった。台湾では、留学始めの中国語の基礎固めと向上、諸外国文化の理解、現地適応能力の向上、上海では、中国語の更なる理解、中国大陸と台湾の比較、中国語と英語と日本語の言語の使い分け、異文化交流の更なる発展、瀋陽・大連では、留学生としてではなく庶民の現地生活の実体験と理解、中国大陸の各地域の相違、これらが私の留学期間のステップと考えられる。辛さとしては、後になるにつれてどんどん辛さが増していったという感じだが、台湾のみではきっと“楽しい留学生活”で終わってしまっただろうと思う。強行突破で大陸へ行き、たったの 2 ヶ月だがまたその後たった 1 週間だが、この 2 つの経験が更に加わったことによって私の中国語留学経験はきちんと実になるものとなった。同じ言語圏内でも一つの地域に留まらず、何地域かにいったことは小さなことのようで非常に重要なことである。旅行では表面的なものを見ることが多い中、生活することによって感じ取るものは全く違う。これらの経験を持って、これから旅行に行く際には生活をするという感覚で各地域を見て回りたいと思う。

また自分の現地適応能力は高い方であると思うが、本当にそれに助けられたことが何度もあった。現に今私の話す中国語は台湾人の発音だと必ず言われる。今更直らないというのが正直なところだが、いつか大陸風と台湾風と両方話せるようになりたいと思う。たった 1 年間だが、各国様々な人と出会い色々な体験をし、考えさせられ悩まされ、今私は“強くなった”と思う。前から意見はさばさば言ってしまう方だがそれに更に磨きがかかったようだ。そして何でも冒険するようになった。正直日本に帰国した後、つまらなさを感じるだろうと思っていた。しかし、つまらなく感じるか、そう感じさせないようにするかは自分の行動次第である。帰国後つまらないと感じているのでは、ただの楽しかった留学生活を miss しているだけである。いつまでも自分の言語、考え方、どんな小さな点でも向上を意識して過ごしたいと思う今日この頃である。

最後に留学中に出会った世界各国の友人、アメリカ（マサチューセッツ、サンフランシスコ、サンディエゴ、オレゴン、ノースキャロライナ）、カナダ、メキシコ、スペイン、イギリス、スイス、デンマーク、オランダ、オーストリア、フランス、イタリア、ドイツ、イラク、台湾、韓国の全員訪れることが私の人生の夢である。

『台湾＆中国・上海留学体験記』　大角 菜穂

■□■留学アンケート■□■

①その国に持って行って良かったものは何ですか？
台湾や上海はなんでも安く買えるから何も困らなかった。日本製品もよく売っている（割高）。フィンランドは高くてあまり物を気軽に買えない。
②その国に持って行かなくて後悔したものは何ですか？
虫刺されの薬（すーっとするやつ）、コンタクトのタンパク除去剤。
③服装はどうしてましたか？現地で服を買いましたか？
その国（気候やTPO）に合った服装をしていた。基本的には日本とあまり変わらない。
④インターネット、音楽、書籍、テレビなど情報環境はどうでしたか？
ネット環境は留学生寮なので問題なし。音楽や書籍は自由に購入や入手可能。テレビは寮にあるため見たいときに見る。
⑤留学生の国籍構成はどうなっていましたか？
台湾：日本、アメリカ、ヨーロッパ、カナダ、韓国、中国。
上海：韓国、日本、アメリカ、ヨーロッパ、カナダ、メキシコ。
フィンランド：ヨーロッパ、アメリカ、カナダ、メキシコ、中国、韓国、日本。
(割合の多い順表記)

『台湾＆中国・上海留学体験記』　大角 菜穂